様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成２５年　６月　10 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2012
課題番号：２３６５３１２７
研究課題名（和文）　「新華僑二世」のアイデンティティを探る

研究課題名（英文）　Research about the identity of second generation New Overseas Chinese

研究代表者
永井　智香子（NAGAI CHIKAKO）
長崎大学・留学生センター・准教授
研究者番号：６０２９５１１０

研究成果の概要（和文）：いわゆる「新華僑」とは 1980 年頃以降に留学、仕事などで来日した中国人のことであるが、家族を伴って日本に来たものも多い。本研究は幼少時に親とともに来日し、日本で成人した「新華僑二世」のアイデンティティを探ろうというものである。9 人の「新華僑二世」の分析用インタビューデータが得られた。当然、9 人が持つアイデンティティには違いがあるが、一つ共通点があった。それは日本と中国両方のよいところと悪いところを見事なまでに客観視できるということである。それは日本と中国、二つの国が融合したアイデンティティを持つ者のみが持ちうる資質であると思われた。

研究成果の概要（英文）：This is a research of the identity of second generation New Overseas Chinese who came from China at the period of childhood with their family . For searching their identity I have interviewed nine young adult second generation New Overseas Chinese. As a results of interview, it was found that second generation New Overseas Chinese have a very unique and complex identity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	900,000	270,000	1170,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：新華僑二世、アイデンティティ

１．研究開始当初の背景

(1)研究のきっかけ

長崎大学には「新華僑二世」が留学生としてではなく「外国人学生」として数名在籍している。そのうちの一人、李（仮称）に李が中学 2 年のときに偶然知り合った。李は両親の留学に伴って来日し、小学校 2 年から日本に住んでいる。李が大学に入学してしばらくたったある日、李は自身と同じような境遇にある新華僑の二世に大阪で偶然知り合い、純粋の日本人とは絶対にできないような会話ができ、強い親近感を覚えたとやや興奮気味に報告してくれた。詳しい説明を求めると新華僑二世が持つ独特なアイデンティティに関係があることがわかった。この経験をきっかけに李も自分自身のアイデンティティに興味を持つようになり、さまざまな活動を通じて、新華僑二世の若者とのネットワークを広げていった。文化間移動とアイデンティティの形成の関係に興味を持つ筆者は李を研究協力者として「新華僑二世」のアイデンティティを調べることになったのである。

(2)新華僑とは

華僑とは中国国籍を保持したままで、海外に移住した中国人及びその子孫のことである。そして、華僑は新華僑と老華僑に分けられる。新華僑とは 1980 年頃からの中国の改革開放後、留学や就労などの目的で日本に渡った中国人のことで、1970 年以前から日本

に暮らす「老華僑」とは区別されている。
2008 年 4 月に発行された『新華僑　老華僑』（文藝春秋）という本がある。その本に次のような記述がある。「…新華僑はすでに老華僑の 1.5 倍もの人数に達している。また、ここ 10 年来、日本国籍を取得する中国人は毎年平均 5000 人近くにのぼっているが、その多くは新華僑とみなされている。新華僑は国籍にこだわりを持たない新世代であるばかりか、積極的に日本に溶け込み、さらには世界とも連携を取ろうという姿勢が見受けられる。…」「「新華僑の出現は伝統的な華僑社会のイメージを変えている」(p4,p5)。つまり、「「高学歴で、専門技術と技能を持つ者が多い」ことが新華僑の特色とされている。そして、研究、教授、医療、技術、法律、会計、人文知識・国際業務、投資、・経営などの在留資格を有する中国人が五万人を超え、華僑社会の重要な部分を構成している」(p260)のである。
以上の新華僑に関することをまとめると、新華僑は日本において、人数的に老華僑を上回り、日本の華僑社会において重要な役割を果たし、日本国籍を取得するものも多く、その活動分野も多岐にわたっている。さらに、1988 年と 199１年に中国からの二度の出国ブームがあったという。そのころ親に伴って来日した幼い中国の子供、つまり、新華僑二世は2011年には日本で20代の若者に成長している者も多いと考えられる。それらの若者が本研究のインフォーマントとなっているのである。

２．研究の目的
本研究の目的は新華僑二世のアイデンティティを探るというものである。なぜ、新華僑二世のアイデンティティなのかというと、文化間移動は人の社会的アイデンティティの形成に大きい影響を及ぼすからである。特に思春期、あるいは思春期以前に文化間移動を行ったものは二つの国が融合した「独特なアイデンティティ」を持つに至るという報告が、移民、帰国子女などをインフォーマントとした先行研究でなされている。
筆者の知る限りでは幼少時に親に伴って来日し、日本で成人した新華僑二世の若者のアイデンティティをインタビューにより探ろうとした研究は見当たらない。果たして、「独特なアイデンティティ」を持つに至っているのか、そして、独特なアイデンティティを持っているとすると、その中身はどのようなものなのか探ってみたいと思った。

３．研究の方法
(1)ライフヒストリー法
本研究ではアイデンティティを探るために社会学でよく用いられるライフヒストリー法、生活史の聞き取り調査を実施した。なぜ、質的調査であるライフヒストリー法を行ったのかというと、口述には現在性と主体性と自発性があり、異文化、あるいはマイノリティーを対象とするときその効力を発揮する方法であるとされているからである。ライフヒストリー法では聞き取った語りを、そのまま一般化に結びつけることはできない。そこから得られるものは仮説である。また、既存の仮説をより強固なものとして検証することもできる。さらに、研究を続けるための課題が発見できるということである。

(2)インフォーマントとインタビューについて
本研究におけるデータとして有効なインフォーマントは９名である。前述の長崎大学の学生である新華僑二世の李（仮称）を研究協力者とし、９名のインフォーマントは全員李の紹介で知り合った者である。インタビューを実施した場所は関西地区、関東地区、そして、中国の上海である。実際には 11 名にインタビューを行ったが、インタビュー終了後、そのうちの二名とは連絡がとれなくなり、まとめたデータの確認が行えなかったので、有効なデータではないと判断した。表１は９名のインフォーマントについて表にまとめたものである。その際、プライバシーを守るために一人一人をアルファベットを使って表示している。

インフォーマント	来日年齢	来日理由
A※１	５歳	父親の仕事
B	10 歳	父親の仕事
C	２歳	父親の留学
D	９歳	母親の仕事
E	10 歳	父親の仕事
F	６歳	両親の留学
G	５歳	父親の留学
H※２	５歳	母親の仕事
Ｉ※３	３歳	両親の留学

表１　本研究のインフォーマントについて
※１　幼稚園を日本で過ごしたあと、小学校１年から中学校２年の１学期まで中国。ただし、小学校４年の３学期から 10 ヶ月間は日本。
※２　日本に帰化している。正確には新華僑二世ではなく華人
※３　小学校２年まで中国と日本を行ったり来たりしていた

(3)インタビューの形式とデータの処理
インタビューの形式は半構成的面接法、つまり、一応質問を準備するが、質問項目は紋切り型ではなく、調査対象者の発言にそうようなかたちで臨機応変に展開することを心がけた。
ライフストーリー・アプローチをとるとき、インタビューにおいて得られたデータを編集や再構成をする必要がある、その際に注意することは、できるだけ語られたままを記述

するということである。9 人のインフォーマントのインタビューデータを再構成したものはデータベース的なものとして紙媒体で 2013 年 3 月に作成した『平成 23, 24 年度　学術研究助成基金助成金　挑戦的萌芽研究　研究成果報告書』に掲載した。今後、論文や研究発表において考察を行う際はすべて紙媒体で作成した報告書のデータを使う。

４．研究成果

ここではいくつかの項目に分けて、インフォーマントの発言を紹介しながら、インタビューをしてわかったことについて述べたい。

(1) ナショナルアイデンティティ（帰属意識）について

9 名のインフォーマントの中には、インタビュー時に中国と日本の狭間に立たされることによりアイデンティティの危機や混乱に陥っている者は一人もいなかった。全員が落ち着いて、客観的に現在置かれている帰属意識に関する自己アイデンティティについて語ってくれた。出自を問われて「日本人」と答えた者は一人もいなかった。Ｈだけが「自分は日本人だとか、中国人だとか断定はできない」と答えているが、残りの 8 名は「中国人」だと答えている。ただ、そのアイデンティは「純粋の中国人」と違うことはその発言からわかる。Ａは「私は中国人のほうがちょっと強いかもしれない。でも、日本人の感覚もあるので…」と言い、小学校 4 年のときにいじめにあったことがきっかけで中国人であることを認識したという。Ｂは「まわりが中国人だと思ってないんですよね」と言うが「私は中国人であって」という。しかし、スポーツの試合があると「中国にもがんばってほしい、日本にもがんばってほしい。だから、複雑なかんじ」だという。Ｃは「日本人じゃないじゃないですか。あきらかに。国籍的な問題とか、血の問題とかがあって…」「やっぱり、中国は自分の国だなって思いますし、でも、日本もやっぱ、自分の国だなって思います…居心地いいのは日本ですけど、でも、やっぱ…心のどこかには中国に対する愛情はあります」という。Ｄは「(どちらの国の人かと悩むことはないけど）でも、ずっと中国にいた中国人の子たちとは多少、ちょっと価値観とか違ったりします」という。Ｅは「やっぱり、中国の血がつながっているから私は中国人だと…揺れたときもありますよ…」とのこと。Ｆは「中国人って答えます。私はたぶん、なんか、帰化してパスポートを日本に変えたとしてもどこかで、中国人の私は残っていると思う」と言うと同時に「…真ん中にいるっていうのが、私の個性っていうか、私の持っているものであって、それをいやだとは特に思わない」とも言う。Ｇは「…私は中国人である割合のほうが昔より高いと思います」「昔は中国人ってわかっていながら、それを否定したい自分がいて、だから、日本人ならよかったのにと思う反面…」という。Ｉは「難しいですよね。日本人だと悩むことはないけど、ないのは当たり前なんですけど、中国人だけど、そうじゃないかもしれないっていうのを考えることはあります」とのこと。

ナショナルアイデンティティに関連する全ての発言をとりあげたわけではないが、その発言から「中国人」であるとは言っている者も、「純粋な中国人」とは違う、二つの国と文化が融合した独特なアイデンティティを持っていることがわかる。

(2) 強い親の影響

文化間移動を行った年齢とアイデンティティの形成の間には強い関係があるという。たとえば、箕浦康子はその著書『子供の異文化体験』の中で「九歳以前の子供は、違う文化間圏へ移行すれば、行った先でそこの一般的な行動パターンをあまり抵抗なく受け入れる」(新思索社 p252) と述べている。つまり、9 歳以前で文化間移動を行った場合は早く「日本人化」が進むとも言える。本研究のインフォーマントはＢとＥが 10 歳で来日し、Ａは 5 歳で来ているが、インフォーマントの中で唯一中国の中学校を 1 年経験している。それ以外の者は 5 歳前後、あるいはそれ以下で文化間移動を行っている。しかし、実際には急速に日本人化が進んでいるものは見受けられない。その理由について、筆者はインフォーマントらの親の厳しい中国式の教育にあるのではないかと考えた。たとえば、次のような発言があった。

Ｃは「…うちは口答えとかしたら、そんな権利はないみたいなかんじで、結構中国式に厳格に育てられたので」という。Ｇは「だから、その中国の部分、中国人である部分が大きいのも両親の影響を受けている。もし、私の両親がどっちか日本人だったら、また違うと思います。どっちかというと両親はあなたは中国人なんだよっていうふうに、教えることのほうが多かったし…」「学校で８割過ごしていながらも、両親の影響、すごい受けているんだと思います。根本的に」とのこと。Ｉは「…中学校では、こう両親の部活の考え方の違い、部活を日本の両親は 100%応援することが多いじゃないですか。…中学校ではなんで部活がだめなのっていうところで、自分は人と違うんだということを意識させられた…」

言語生活についてはＣ以外は親と中国の方言や北京語で話している。子供のときにいつ帰国するかわからないということで親から厳しく中国語を教えられていたのはＣ、Ｆ、Ｇ，であり、Ｈの母親は急速に中国語を忘れていくのを見て、強制的に自宅では中国語を話さなければいけなくなったとのことである。

両親が中国の教育方針で教育するという

ことや、中国語を忘れてほしくないという強い気持ちを持っているということは、子供のアイデンティティの形成に大きい影響を与えるのではないかと思われた。

(3)日本と中国両方のいいところと悪いところが客観視できることについて

9 人のインフォーマントの語りには中国と日本、その両方を客観視できるということに関する発言が非常に多く見られた。そしてその能力は「純粋な中国人」「純粋な日本人」には持ち得ないものであるとインフォーマントらは思っている。そして、両方の国を客観視できることをポジティブにとらえていることがその発言からわかる。

以下にいくつかの発言をあげてみる。Cは「…日本の国の知識と中国の国の知識を両方ちゃんと持っていたら、お互いが何で怒っているのか、ちゃんと理解できるじゃないですか。だからそこも自分でも冷静にみることもできるし…」という。また、Fは「私は日本に来たことで、まあ、なんかこう微妙な立場に立たされたのは確かなんですけど…、でも、なんか、そのぶん、もう一つの世界を知れたというか、たぶん、ずっと中国にいたら、それだけが自分の世界で、ほかの世界って想像もつかなかったと思うんですよ。でも、まあ、こっちに来たことによって、日本の世界を知れたし、かといって、中国の今までいたところはわかってるし、いいところとか、親戚とかもいるし、そっちの考え方に触れることもできるし、なんか、こっちはこっちで、私の考え方とか、私の周りの日本人の考え方とかを知ることもできるし、結果として、今私が真ん中にいるのは私はすごい、あの、私はよかったなと思う」とのこと。Hは「両方の文化がわかるし、両方の言語がわかるし、そういう人たちの気持ちも普通の純日本人よりはわかると思うので…」。Ｉは「中国の人と接するときに日本人と比べたら、親しみを持ってもらいやすい。日本人と接するときと比べるとより、親しみやすい。どっち側の人からも結局自分の国の人とは思われないだろうけれども、じゃあ、その相手の国の人と接するときと比べたら接しやすいっていう部分は強いんじゃないですか」。

(5)まとめ

「新華僑華人は日本に生まれ育ち、進学し、仕事をし、日本で生活することで、日中両国に深い理解と親近感を抱いている。彼らは日中両国の「境界人」であり、どちらにも完全に属さない。彼らは二つの世界に生活しながら、二つの世界のどちらにとっても多かれ少なかれよそ者である。しかし、こうした「境界性」は彼らを「より広い視野を持ち、より鋭敏な知力を持った、より公正で理性的な考えを持った個人」にさせ得るものである。(中略）新華僑華人は自身の聡明さと才知によって、日本の華僑華人社会や日中両国の経済発展と社会の進歩のために、かけがえのないおおきな役割を果たしている。彼らは 21 世紀の日中両国にとって、非常に大きな、かつ得難い共同の財産なのである」。

これは朱慧玲の『日本華僑華人社会の変遷』(日本僑報社 p190)という本の一文であるが、本研究において、インタビューを実施したことにより、朱のいう「境界人」のアイデンティティの中身を多少は具体化できたのではないだろうか。つまり、インフォーマントらの語りから「境界人」としての彼らのアイデンティティの中身が少しわかったと思う。

9 名のインフォーマント全員に共通していたことは、日本語と中国語、または中国の方言を自由に操る。純粋日本人、純粋中国人では到底不可能であるレベルで二つの国を客観視でき、両国の価値観を持つということだ。そして、彼らはそれをポジティブに、つまり、「強み」としてとらえていた。

9 名のインフォーマントらはインタビュー時、大学を出て、働き始めたばかりか、これから社会に出ようとしているかのどちらかであった。全員が、仕事において「境界人」としての「強み」を活かしたいと考えていた。就職を間近に控えていたHは次のように語った。

「自分が育つ中で仲の悪さ（日本と中国の）を見てきました。この現状をよくできるのは二つのバックグラウンドを持った自分にしかできないと思います。日本人が中国に行ってビジネスをしようとしても受け入れられないかもしれません。中国というバックグラウンドがある自分はやさしくしてもらえます。そのような強みを生かして貢献できたら、その中で少しでも両国の関係改善に貢献してみたいです…」。

はたして、インフォーマントらの「強み」は社会では実際にどのように生かされるのであろうか。次の課題として、調べてみたいと思う。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

日本華僑華人学会　2012 年度年次大会
時：2012 年 11 月 11 日
場所：九州大学・日新プラザ
テーマ：「新華僑二世」のアイデンティティを探る

６．研究組織

(1)研究代表者

永井　智香子（NAGAI CHIKAKO）
長崎大学・留学生センター・准教授
研究者番号：６０２９５１１０